



喫茶南方録

四

卷
四



門 7 8
森
卷

契茶南方錄 四

書院其至子



書院見卷子草庵小むまき曲尺割板を交れ
事根元何れ曲尺に本はき極めたる事と人皆
不知故事小依り迷或すれ也凡天地順行曲尺
ありは事小亡用を加へる節成む小立は方中実
を加へるむと立一日と辰より申るお時ふり夜を
あふふく陰陽ふ氣小顯り人をもあつた

と語ふ事此元傳にのくむ曲尺と定規として
大小とも不曲尺に遠ふ事なり。又ハ陽に對也
形も然る物に陽之世も曲尺なるを陰の曲尺と
す本式を陽にのみを用ひて六毫不用草庵を陽
に蓋子本式を院の格式と本とす歟といへども
陰陽とも用ゐる子細あり書院蓋子とも陰陽に
用ゐる子細な事なり其子細を得せしめば
相違するを以て根元と極をぬけり何れも自由

成る事。たとへば真れ字と習ひて右時を行き
ぬまゝの格を全つて。崩さず本に遠くす
草庵名斗り習く筆墨タカに本に失ふ事
多し。或ハ真字○類有るを去れ人依り紙行習ふ
命し古人草字に妙を得る行字の妙は紙行
文字の妙を得る有り草行は名大妙と得る程に
人依る不得とも真字に本性を失ふ程にあり
真字入草より入行が入候名に入る且入るに勢は大真

後一同之真入^其人々は質^生なるを成る老人世^勢覺人
必真^{コトヲ}と^事なりん得る院屋子^{コトヲ}は^事練^事し^事修^事
く草庵修行すべし一向^{コトヲ}えり^事の^事を^事一^事に^事草
庵^風れ^風味^風を^風事^風が^風師^風も^風人^風能^風る^風間^風有^風へ^風き
る^風佛^風に^風し^風と^風な^風し^風如^風ふ^風大^風な^風れ^風氣^風小^風な^風る^風事^風ふ
^密呪^密して^密頓^密漸^密と^密して^密一^密通^密する^密や^密法^密具^密あり^密の
急^密に^密知^密く^密し^密と^密す^密故^密に^密知^密く^密事^密する^密之^密を^密草
庵^密地^密に^密して^密具^密客^密と^密し^密初^密世^密大^密法^密を^密一^密遍^密習^密の^密先^密法^密具^密

も一具二具と極免我^密所持^密の^密を^密と^密白^密ふ^密道^密々^密所^密と^密相^密
^後修^後念^後念^後を^後方^後曲^後尺^後相^後と^後極^後する^後事^後ハ^後老人^後心^後斗^後の^後
人^後も^後成^後る^後事^後之^後具^後上^後小^後本^後心^後に^後得^後る^後法^後切^後に^後好^後修^後行^後に^後は
と^後行^後ふ^後事^後も^後同^後と^後ふ^後茶^後ふ^後ら^後る^後之^後に^後修^後行^後する^後院^後方^後と^後習^後
る^後や^後も^後別^後有^後る^後一^後返^後く^後も^後茶^後湯^後に^後味^後を^後草^後庵^後有^後
真^後に^後是^後院^後屋^後子^後を^後式^後法^後義^後に^後若^後き^後と^後用^後せ^後る^後の^後法^後之^後
草^後の^後小^後片^後な^後ま^後の^後地^後の^後一^後片^後ハ^後本^後式^後の^後曲^後尺^後と^後な^後し^後と^後
云^後とも^後修^後ふ^後か^後修^後ふ^後離^後れ^後事^後と^後忘^後れ^後真^後味^後と^後無^後味^後と^後修^後する^後

陰平此陽と云角——世時連も陰を陰するもふ
事ふ——右大相にて動弁す角——天此れ角の二氣
も夏夏温暑此の時節も凡る言はる事有るこれ連
春と秋と云ふ事と云ふ大云ふこと——一云此内の
事ふもなる能ふも別する能ふ——宣ひ——
本林采録も一云之聞のい^実笑く故外別傳も地伝大
悟^悟者も可^可感心あり——
一器れ初初座座の向の仕成と尊りり此は卷子

祝儀
佛同
口付
主

書院也^か各々が福もねも陽を用ゝ夜を陰を有^り
草席を小をおも入内物ねも此事と有故
ねを吹味不^ふと^作相^相済^済や^つる事ふれ^れも^初
座座座陰陽と云角^角す事ふれ^れは^半て^調う^半入^入を
以^以能^能ず^ず了^了簡^簡す^す角——歌^歌
床を床座席ハ^ハ床席棚^棚二^二調^調一^一半^半二^二寸^寸二^二調^調
世歌^世あ^あて^て人^人得^得有^有角——或^或ハ^ハ此^此初^初ハ

床墨跡 席 ^{冷又ても} 棚 ^{香合}
^{風陰} ^{旧第}

右二年一洞也惣々床と栢れね同極ふらやうに信
ふ——二洞一と右と心得る——番れまふかあるす
書院是子草庵ふても棚床在席皆洞皆とにあら
を思ふや曲尺〇ンたるのしきふても自由にする——

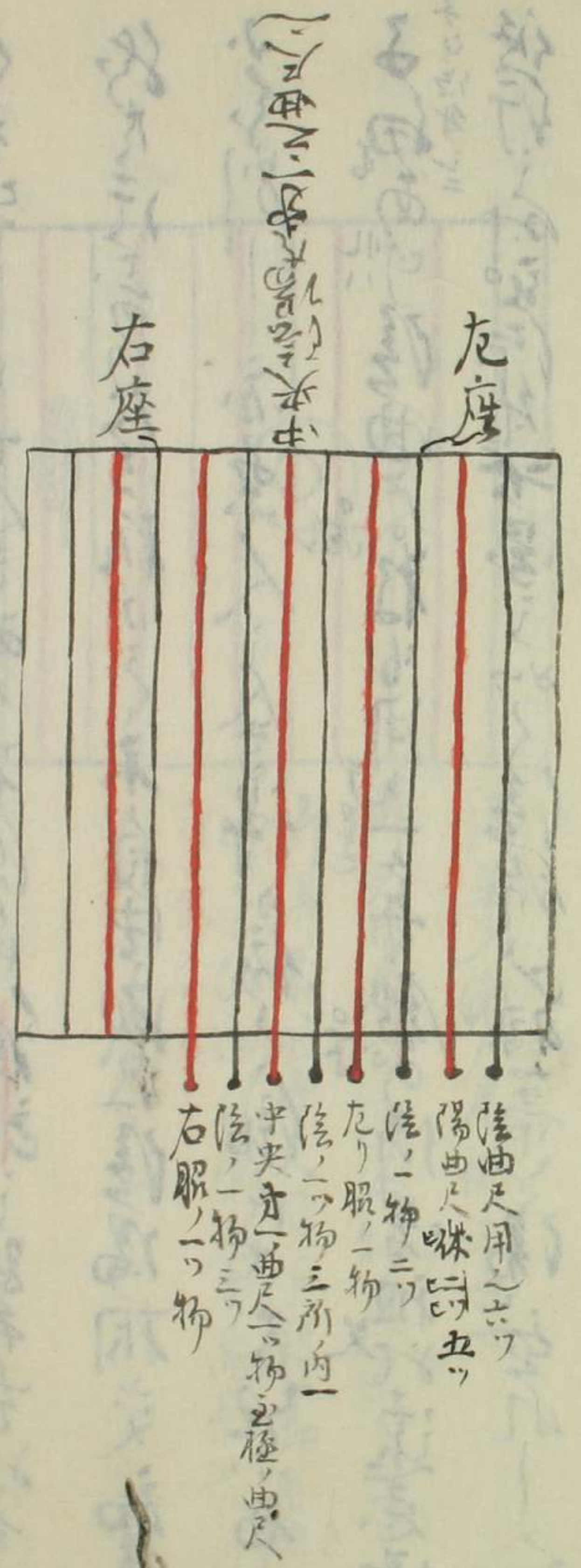
みつ曲尺と事一洞〇六加へく十二曲尺を傳受あり
時未夕陰陽れ居別委あ令得せられハ逆成減事
多かり——才一〇五十カサリ〇庵子と事居れ在席〇方と
あつた斗ふてた——〇之依之不實〇暗かしく居たり

〇五十一

小休白ていねひれ同年感在する之歸りを知りても
等々曲尺と事別々なりハ不自由又あやまち有某
と道陳〇度同〇秘事と斗ふく信授授せず信授〇り
居りハハ道陳とね——〇すもなり秘事とも不
教と云く——ハ左極ふてある——〇我ホ有財道陳〇と
室陳と事一何たるや進〇今我室陳〇同——〇たす宗
惟同——ハ事悟ハ悟先れ信深切に人成〇故具ニ教
られ——ハ初大切言知人梯〇之故ハ不教〇凡之〇家五曲尺〇金

名教して中調^{のりぬ}あけけりあつても同くはこれ
 事法ふも不及同得する者子とふ^{○まへし}一宗易に於て秘
 事と不致相傳^{○まへし}師坊ハ深切にまゝしてめり同く
 る秋等^{○まへし}法^{○まへし}諸人へより増りいふも可傳也吉日と
 云々みく相傳^{○まへし}句一建^{○まへし}未正十九年十月廿二日傳
 具^{○まへし}中^{○まへし}荒^{○まへし}九^{○まへし}記ス

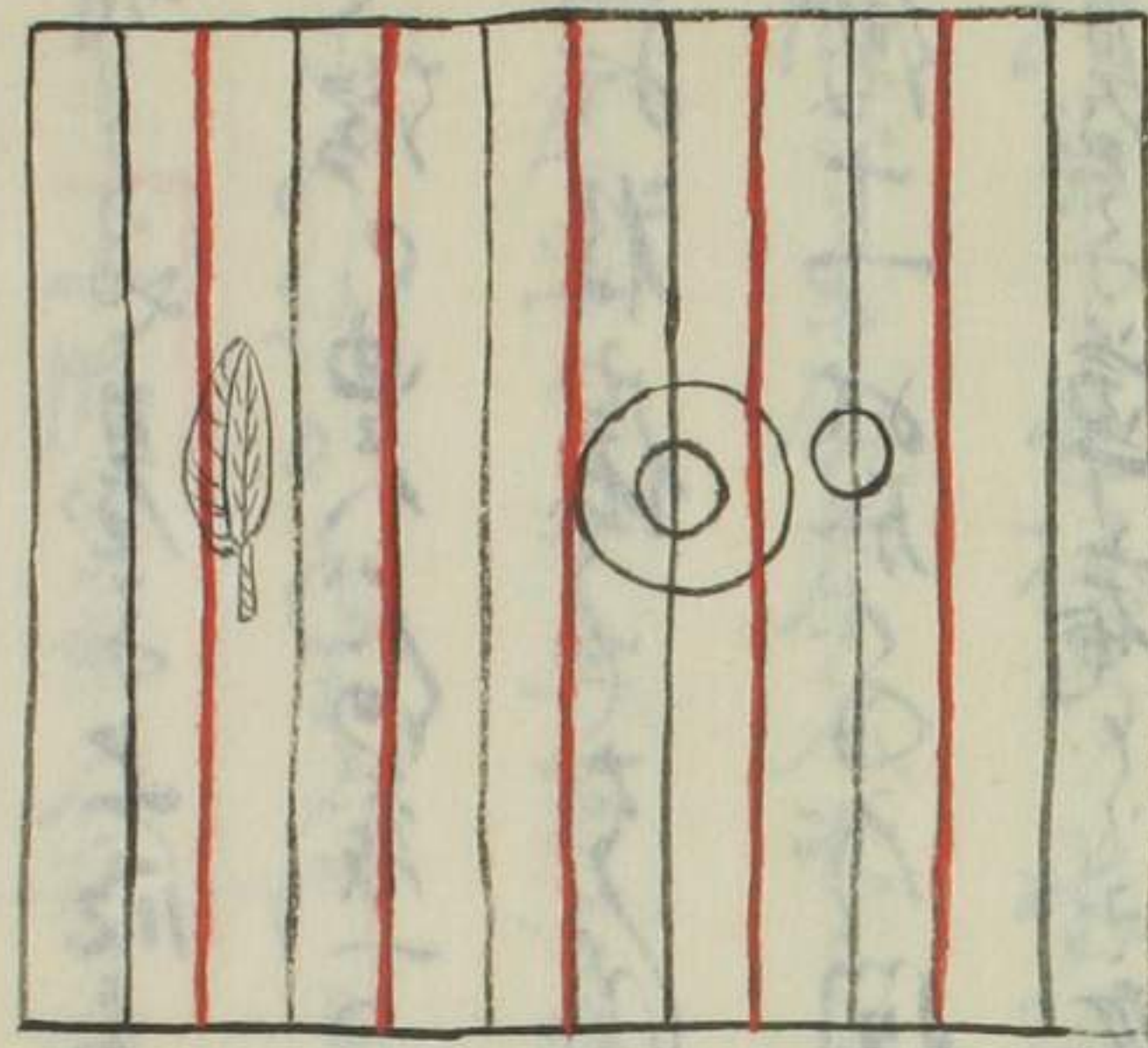
十一^{○まへし}曲尺^{○まへし}六^{○まへし}陽是を體之曲尺と云
 六^{○まへし}ハ^{○まへし}陰^{○まへし}く用之曲尺と云



吉^{○まへし}山^{○まへし}一^{○まへし}陽^{○まへし}明^{○まへし}ハ^{○まへし}山^{○まへし}とす^{○まへし}後^{○まへし}其^{○まへし}時^{○まへし}环^{○まへし}勿^{○まへし}陽^{○まへし}之^{○まへし}書^{○まへし}院^{○まへし}
 押板^{○まへし}童子^{○まへし}一^{○まへし}陽^{○まへし}飾^{○まへし}之^{○まへし}礼^{○まへし}又^{○まへし}懷^{○まへし}旧^{○まへし}年^{○まへし}陰^{○まへし}之^{○まへし}それ^{○まへし}と
 翻^{○まへし}孫^{○まへし}を^{○まへし}受^{○まへし}す^{○まへし}人^{○まへし}み^{○まへし}く^{○まへし}一^{○まへし}品^{○まへし}記^{○まへし}明^{○まへし}飾^{○まへし}と^{○まへし}年^{○まへし}廿^{○まへし}一^{○まへし}是^{○まへし}子^{○まへし}

いづもく陽に飾と云ふ夜會に陰飾陽と云ふ
 飾り大なる一箇り會に陰飾と云ふ事ハ此の事あり
 又此の事ハ草庵のく初後にも陽に曲人陽に飾ふ事
 くさふとせざる事あり事ハ此の事ハ此の事ハ
 然るにありたる極小く不自中成に陰陽相交初後
 小なり一糸糸人々會得に依く飾さく事ハ此の事ハ
 子細子細あり陰曲陰曲にねも用用一年一年の御増祖御増祖に遠忌遠忌御
 徳行徳行の時時に御増祖御増祖に依く陰飾に羽羽等と陽に依く

〇休二聖子ハ此の事ハ



御茶入御茶入に御戸御戸肩肩三三分分ニ
 御天目御天目是是ニル名物名物原力原力のキ一物
 御佛御佛前前に御天目御天目ニ殿下殿下御自能御自能
 御茶入御茶入ハ御自能御自能ハ常常に御茶入御茶入ニ
 陽陽ニ分力分力ハル

右右に如く飾し之は少く同じ曲人ハ人持人持義飾義飾も取
 然然之又右右に飾りしは天目天目新新の御茶入御茶入ハ少く
 茶入茶入ハ此の事ハ此の事ハ此の事ハ此の事ハ

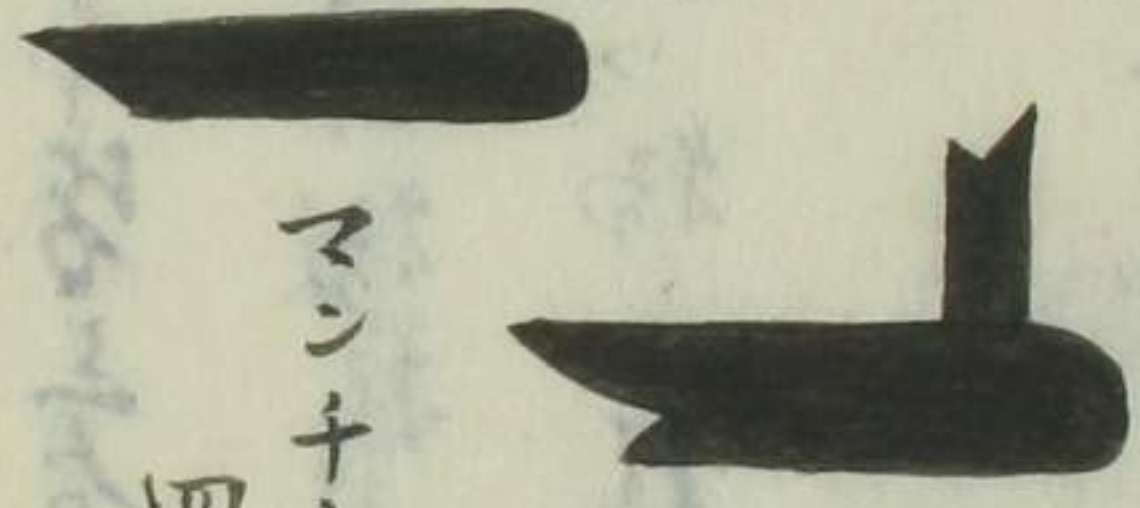
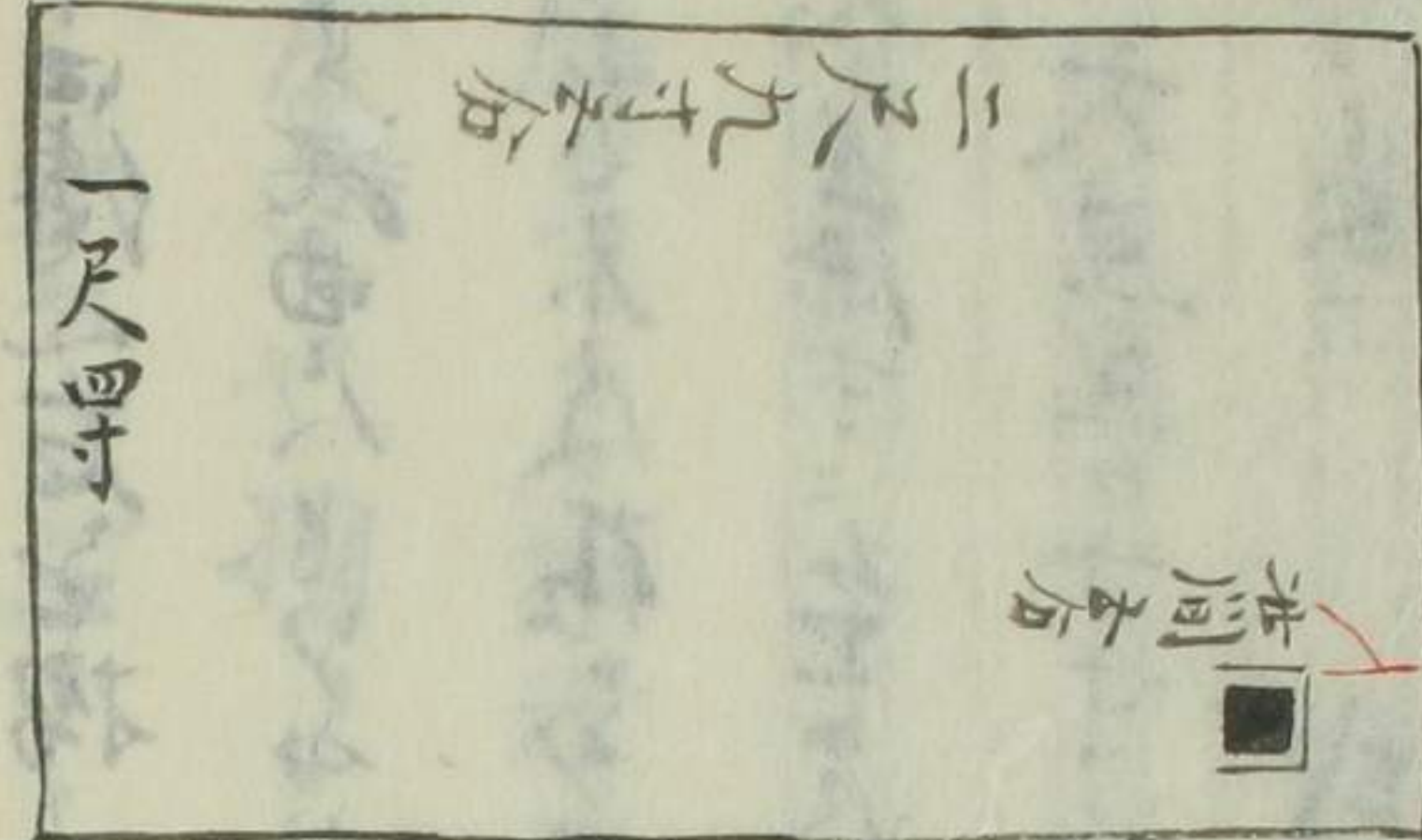
らるる南無事ゆく休自ふれ佛事之を時依る
金一物と云事何ぞもさうさく宝一物と
心得一人有る事二十より至ても具内二つ物曲人
かく明らや墨子上段に^{イシヤウ}明^{ヤウ}物もふ一つ曲人右記
^{影の}かくや端の曲人何處一物石用瓦座の自外右
道具れね依てちのすといふ事有りねの如
事之彼十一れかゝる間入る曲人ちづれと好
書院墨子草庵と云座入用と云

七つ組れ事長板より水指より角一柄持立風呂を
至上段の草庵茶入れと云めはあれた今一何ぞと上
段に座座思ひききと角一れ中入るたもかゝる
羽筆はれ物かゝる物と云一又かゝる金
ても一上段の茶入れと云先草庵と云ふと飾合
付たりれ墨と云陽と曲人^陰明^陽ハカと云宝事と云
漬の曲人といふ書院墨子の座入事取記と云や
めり者と云事と云と云一各持時ハサと云

又或人^{三寸}二寸七不若

上板厚リ六分

一板大リ五寸角一分メシ 長板厚リ一寸五分



マシナウメン
四分

マシナウメン
四分内ミテ

大見子^其東山殿^其中^其竿^其目^其三ツ^其ま^其く^其佛^其所^其持^其有^其し^其か^其た^其

幅^其長^其リ^其曲^其尺^其ニ^其相^其一^其ハ^其一^其ツ^其ト^其張^其為^其ス^其事^其有^其リ^其而^其モ^其卷^其子^其用^其

ニ^其分^其回^其中^其ニ^其テ^其能^其阿^其弥^其好^其ミ^其テ^其曲^其尺^其能^其據^其ル^其ト^其云^其別^其左^其寸^其法^其也^其

大見子^其至^其方^其ニ^其卷^其子^其至^其向^其ハ^其守^其カ^其ル^其内^其五^其寸^其ハ^其屏^其風^其ノ^其余^其分^其ニ^其

二^其分^其三^其寸^其云^其分^其祈^其之^其左^其右^其大^其小^其此^其縁^其際^其一^其ツ^其ハ^其イ^其ヤ^其

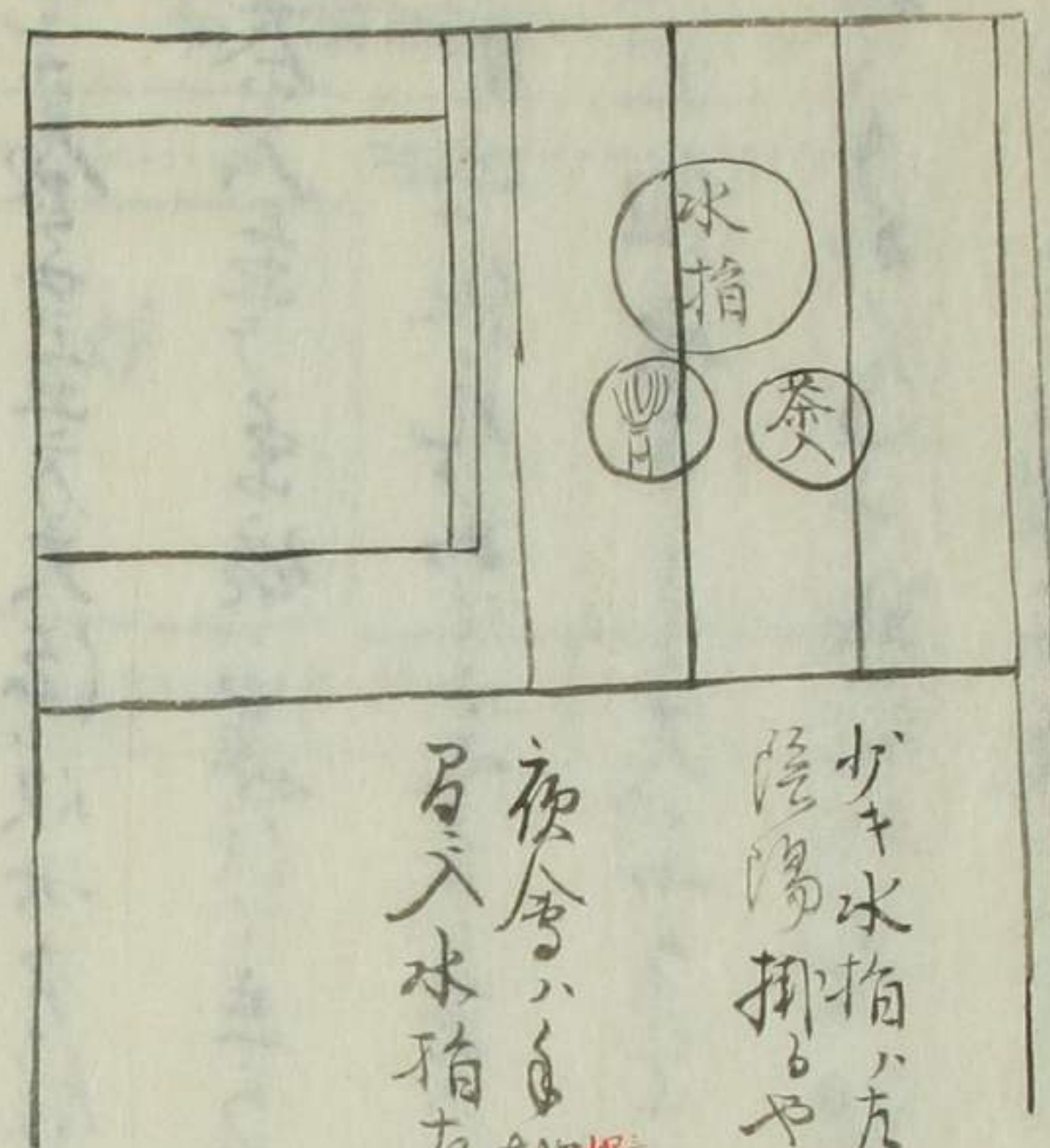
一^其長^其 二^其尺^其七^其寸^其五^其分^其

一^其板^其幅^其 五^其尺^其二^其寸^其又^其六^其分^其ニ^其七^其分^其

大板右より——**休**而持し綿袋ハ板委是ハ佛墨子所し
マこのまほ接之而墨子飾り此時を墨くゆく下板の板を
子より出給ひて此果をされし大戸ト云ハ此戸一板アケ
あて有る具外と此果をさるび人^{三人}合ふて有るてさるるを
佛果を清きて^拵其時茶点配し人ハ接し^{きり}りとしてその
縁右有る水の^{カニ}接し水として佛果具清て墨子
てふふ亦運ぶ物も此佛ハ接し^{おのまじ}りて下し其候墨子
はかふるも水は而佛前よりんや故具人得有べし

さうくもけふふ心得て水と墨子と大戸右^{より}三間余に
當此川板足りともび大戸入^の時^の此^の吉^の心^の人^の得^の亦^の板^の法^の
炭^のき^のあり具^の板^の練^のて者^の也

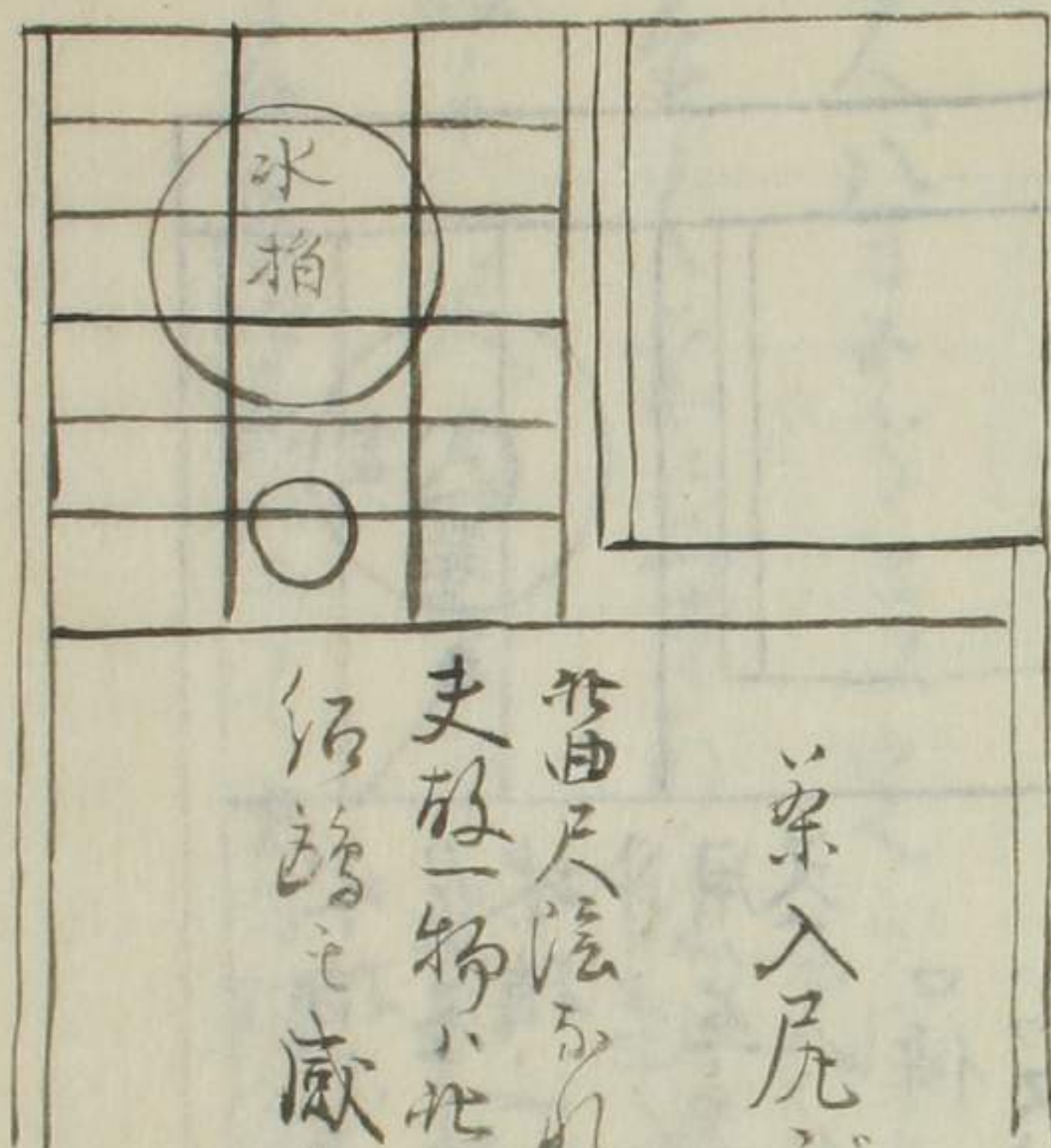
草席此板寸法定まうす此利^休又まに相決れり
大墨子乃法ういふ事とる^の板^の——用て向板を人守に
定て也長板幅一尺守^テ元^ト此^の風^の板^の一尺守^テ口^の板^のト
向^ニ二寸さる^る板^の入^レハ墨子向守^テさる^ると二寸さる^る板^の
ハ九^リ二寸と通^ス具^の至^ル方^ニ有^ル條^の秘^の事^のハ用て惣^お合^ひ一



ガキ水指ハ右何デモ湯勝メ
陰陽掛もやうすへー

夜舎ハも^格を^格水さー
月入水指方りへ^格カ

後座如仕客附方、左、炉、不、成、格、事、各、別、義、也



梁入尻ぶろ

當尺法、左、水指、り、三、湯、成、
丈、故、一、物、ハ、此、是、是、利、休、各、別、也
沼、端、ハ、藏、心、ト、云、

九寸云々
小板

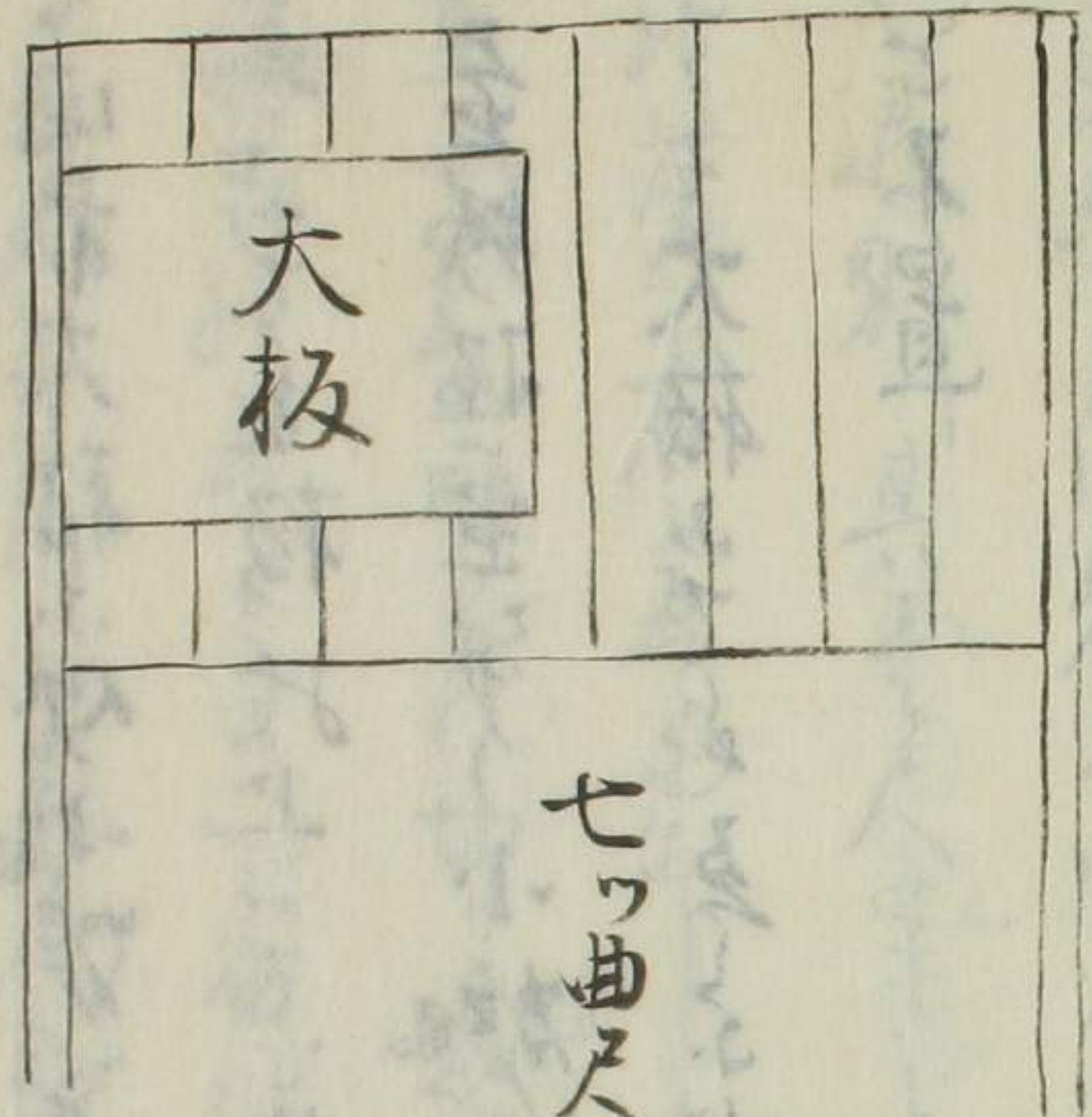
中央ノ物之一尺四寸ノ所

此は小板を中央に法之堅き所四寸あり向ふ寸
是ハ休ノ十又ハナト中央ニ魚子ニハ是具ハ
かやう小板とあり何れか一ヤカをこれ九寸
小板ともいふと云ふ凡そ此ハ心ニ依リ小板と云ふ
格ニある

惣て墨子ふくも墨同ふくも中央も曲尺に極も曲尺
 をふくも名物秘蔵の物をあつても中央も曲尺
 板も小具人得て——風流を就中墨子も墨侯
 下——用いゝる物故に墨を廣くふくもせても墨
 同もふくも小板に墨を墨付より墨人墨も限りて
 外へは出てもふくも墨を墨子も風流に墨を墨人
 墨も曲尺も右も墨も曲尺も墨も曲尺も墨も曲尺
 角も曲尺も墨も曲尺も墨も曲尺も墨も曲尺も

なるやうなれども中央より曲尺の可量^多るの板を之に
 と糸入の對しつゝありつゝ半大成糸入れ貴
 板より半一列を命しつゝ湯水指や常可有也
 風流のく水さるゝつゝ半さや知く有
 りふ事しつゝ利

中板九式に對しつゝ曲尺の可量るの板を之に
 なるやうなれども中央より曲尺の可量^多るの板を之に
 と糸入の對しつゝありつゝ半大成糸入れ貴
 板より半一列を命しつゝ湯水指や常可有也
 風流のく水さるゝつゝ半さや知く有
 りふ事しつゝ利



セツ曲尺ノ田舎

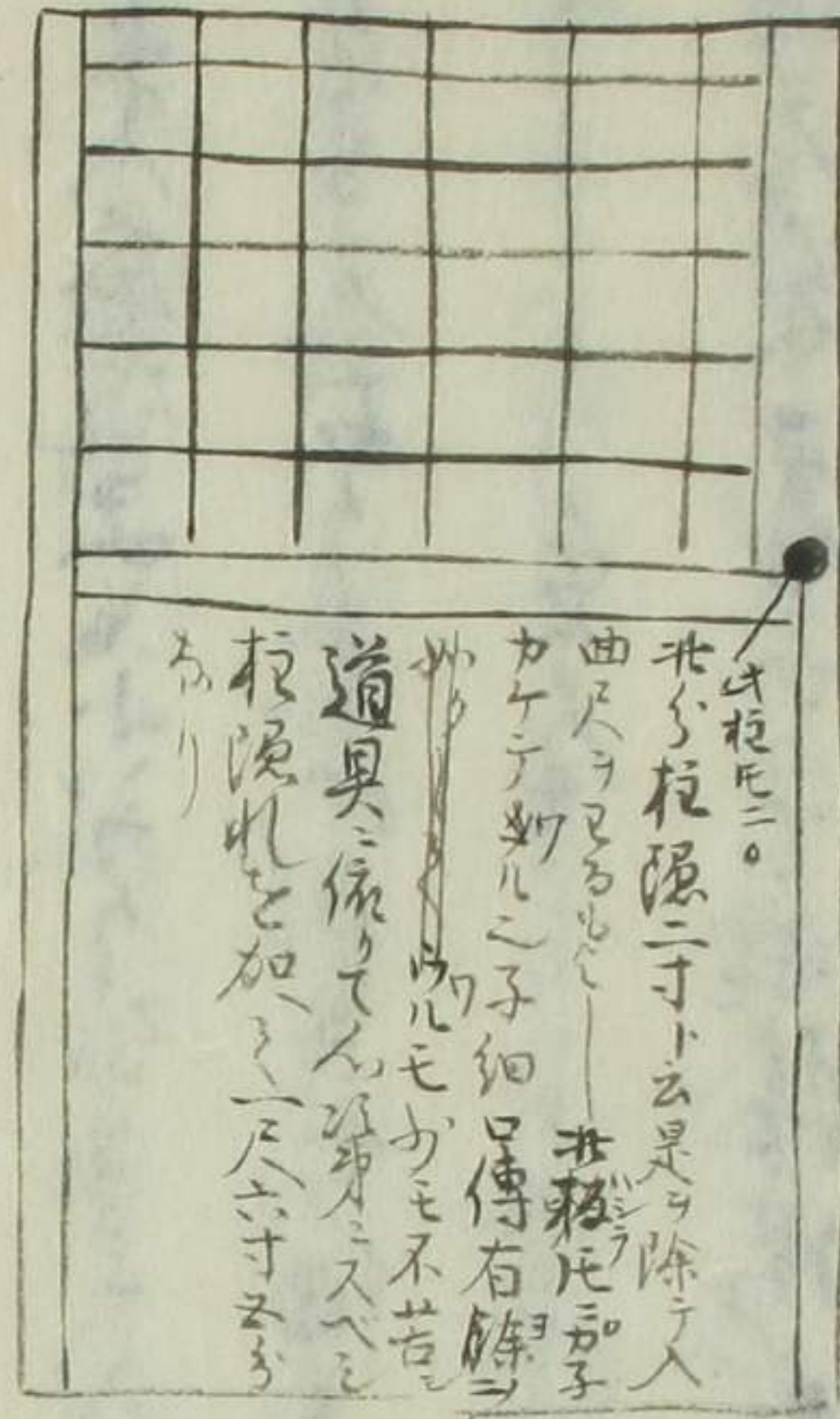
なるやうなれども中央より曲尺の可量^多るの板を之に
 と糸入の對しつゝありつゝ半大成糸入れ貴
 板より半一列を命しつゝ湯水指や常可有也
 風流のく水さるゝつゝ半さや知く有
 りふ事しつゝ利

花

1

秋

い道具屋方根はく屋目切りをきつ物底ちと不
有るも別しきや

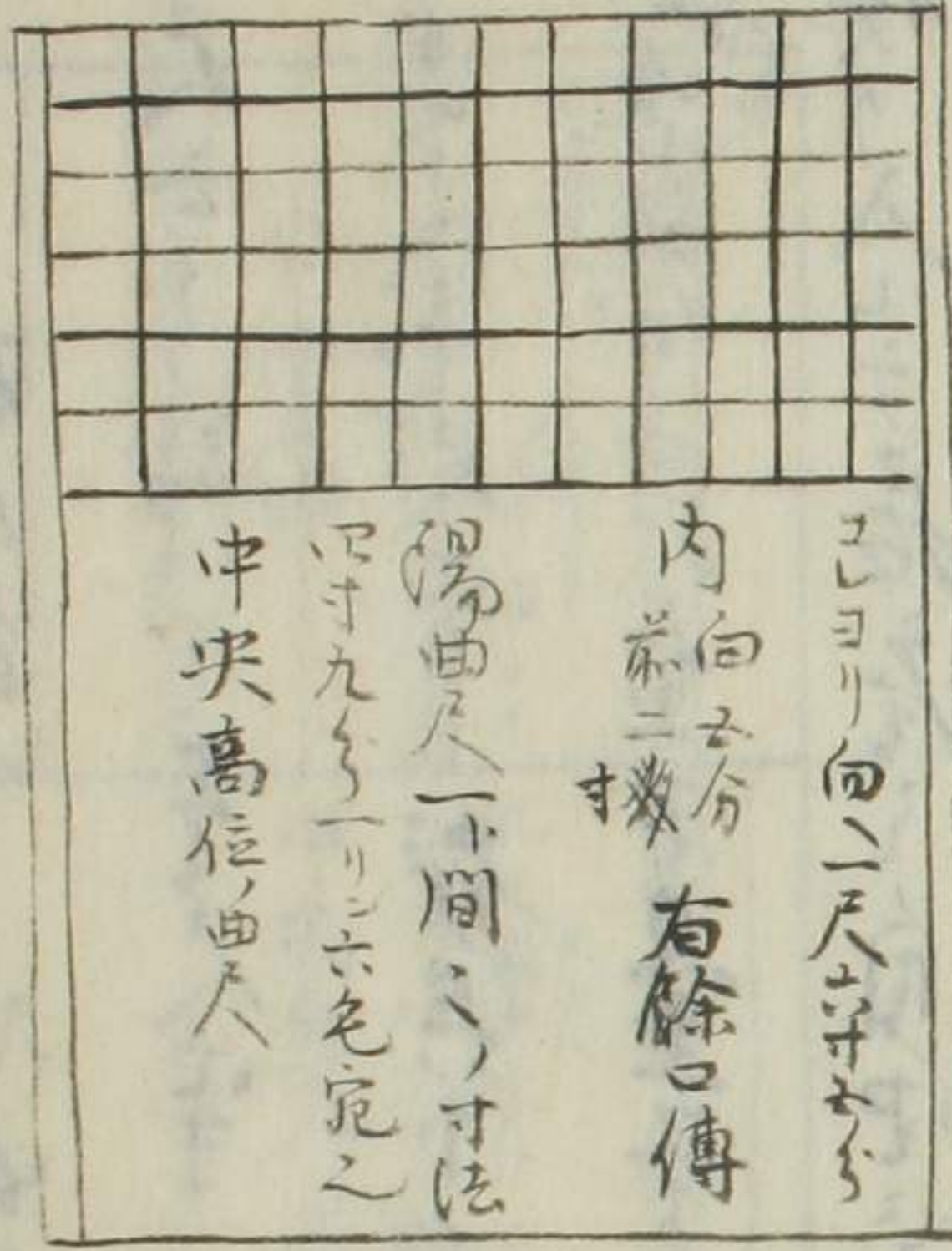
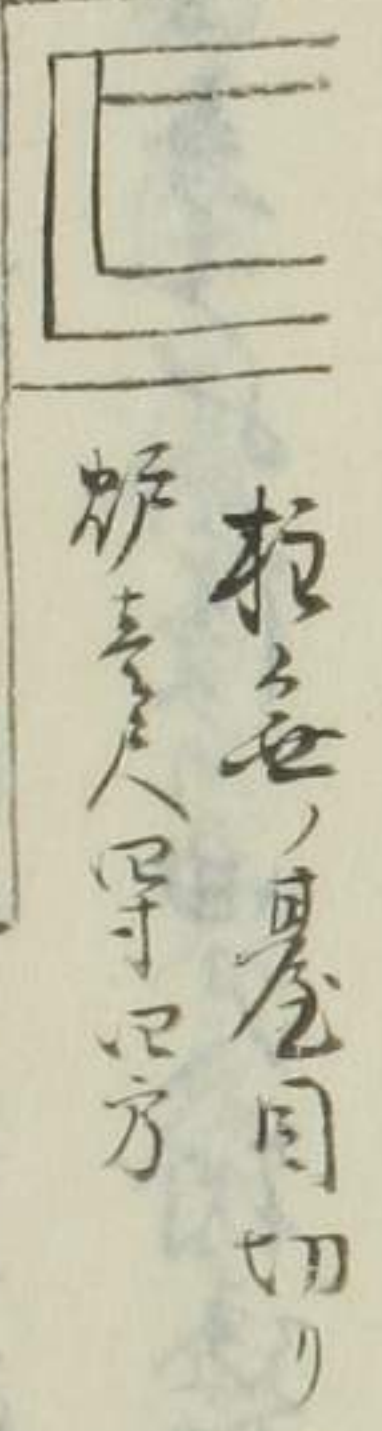


北に根張二寸云是は除入
曲尺よりもちき 根張は子
カケテ物ル子細目傳有餘三加テ
道具は依りてんは第ニスベ
根張れを加へ一尺六寸ま
あり

唐目切ノツモノ、
口傳シナク有
ルニん得チアヤ
二千スルナリ

根ちし此屋目切り 自由ちれしも茶式ハ且ま子根一寸宛
合せて是等四方は根りてさるる根張る根有と申す是

子の天井板長板しも根接はす曲尺割根元放根屋板
二寸角多し縁り分退てすふ曲尺ふ入り細金るれ
積りあり



コレヨリ向二尺六寸ま
内白云分 有餘三傳
湯曲尺一十間ノ寸法
四寸九分一リ六毛宛之
中央高位曲尺

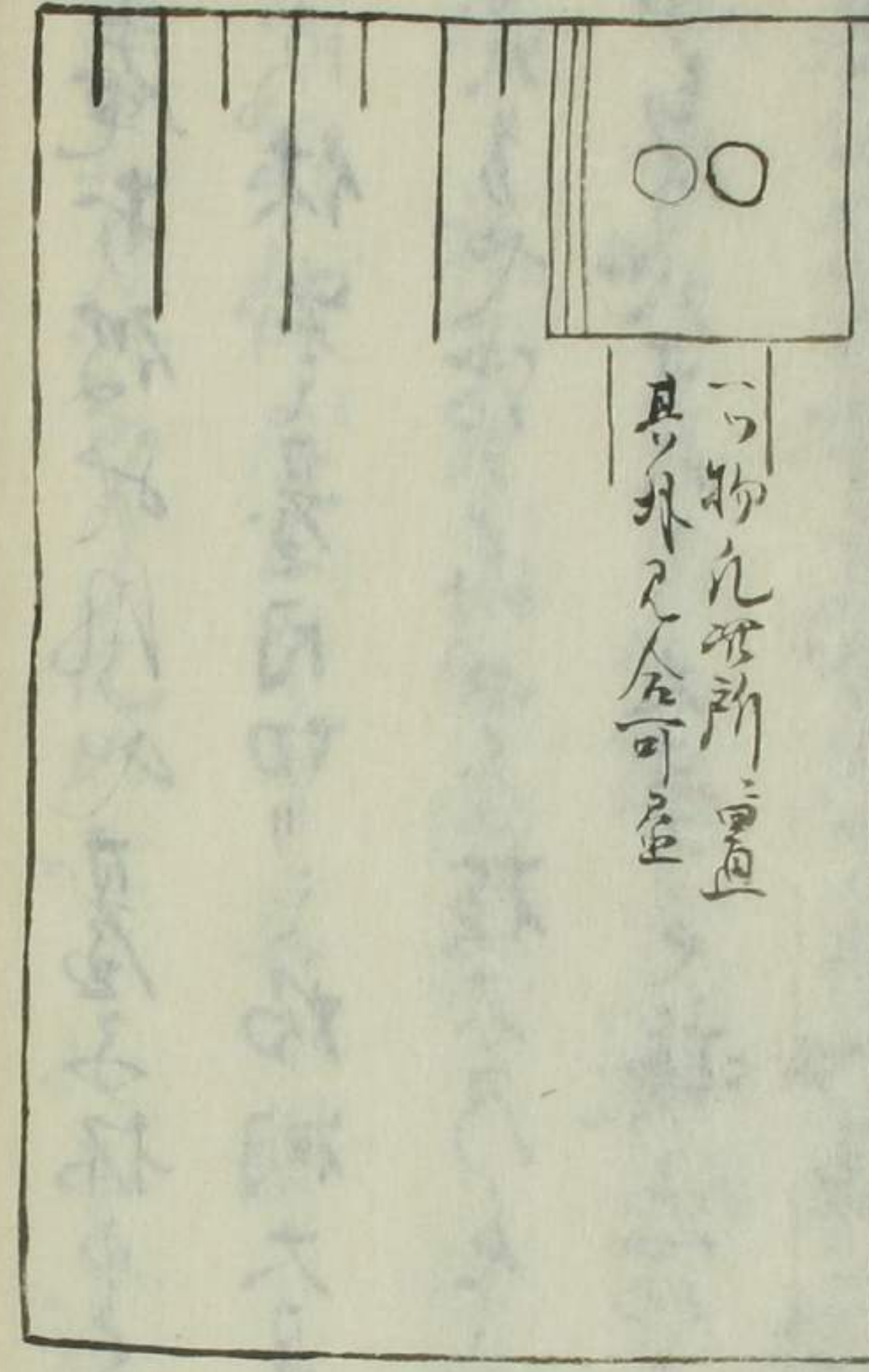
書入
大小の墨子中板おまゝに右格式之反方以下為草席
小座おまゝに各物斗に添へて用お給ひ秘蔵の事
物等すりふるゝを金一と稱休定老一の休休
茶ぬるの先^茶と物入ゝとて一眠一序て白本と云ふ
物^物曲尺の座一の和山と小^小煩のキハ右座の焼
名物と稱せ給ひ故御殿にて休飾られし時と
我られ休座ふゝゝ各座^杯物と云ふ我一のとも
居連三分一ありんかやう此書成自中す此事を

草庵お破れ風や墨子杯と稱^唯墨子右座
所^所休と墨目切りと物棚大墨子と曲尺と二
九寸八寸や端をみても横本乃とて四方惣合を人
六寸あり八寸八寸九寸と稱^{ツラ}と端をみてもこれ合せ
八寸の福あり此八寸と云^秘事と休ハ物棚を^く合
と^口り。く^口り此心之と物棚より一と一墨子又と人
寸七寸幅と云ふ人かゝくも物と云ふ

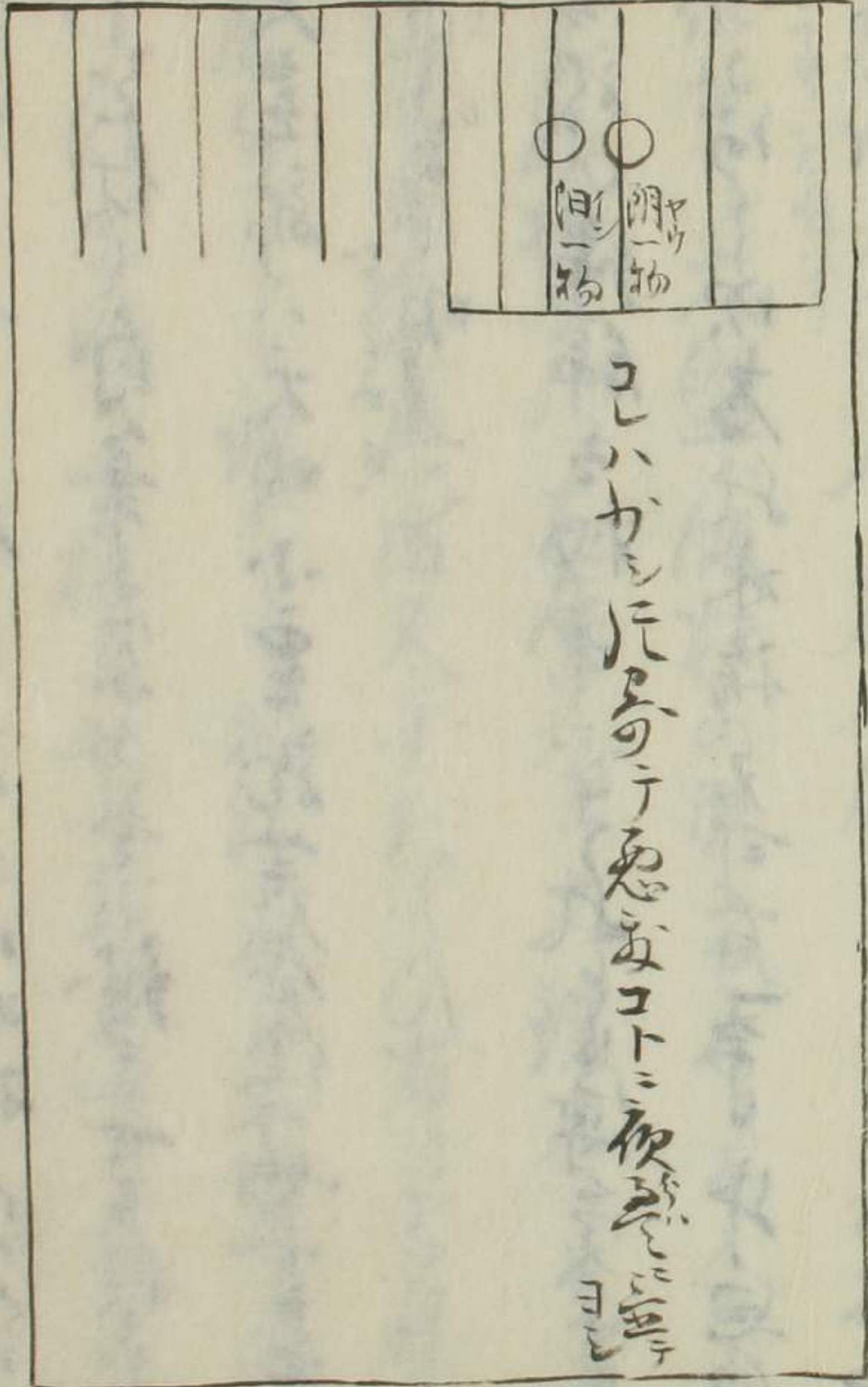
此墨子寸七寸と稱おて左陽二の御陰三の御と云ふ故
と云ふ上は短短と通り用ふ

通り棚連一面九寸の棚も初めや巻子上は同意
 之を角棚を規矩で入る得ぬは一二及記

小棚之間くくり棚と云



中棚寸法左記
 陰陽とも木ノ曲尺を用ゐる



利休を新しき金多磁を新しの水指と紋紙を繪
畧ありしを休より自筆の字と金多磁とせられし畧物
諸より大を新しき大明小を新しき戸金作り也小を新しき
かしき新しき明しき

多磁を新しの水指と秘事とせられし傳受小しきの
時に用御ふらふ次は水指不可有事と申しし
休より茶會あり三月半も未タ御ありし
こいりかきし畧物とせし金多磁とせられし水指とせし

たしきの
〇ゆきとせられし一より七を新しき水指とせられし

〇ゆきとせられし一より七を新しき水指とせられし

持出たしきとせられし白布大茶巾にてしきとせられし
とせられし金多磁とせられし水指とせられし
新しき水指あり大磁の飯櫃の形にてせられし中寺
ありし水指ありし大磁の飯櫃の形にてせられし中寺
氏より新しき金多磁とせられし水指とせられし
諸より大を新しき大明小を新しき戸金作り也小を新しき
かしき新しき明しき

なしく湯鹽下臨海の柳トハカリ七五△多徳

多新く御水指く故実休曰永享く以普廣院

人王百三世後花園院

殿湯痛中林裏より御燭の御系を^時鎌倉に

茄子茶入衣山乃御天月青磁の雲龍乃御水指

三種と云々進^を御本後く後後養食意小見屋子^の御

茶あり一赤松前司^の御茶可仕^の由仰と云より貞村を

時^の家臣^の時^の文^の元^の人茶式と云好人く同明達

及い新き^の衣乃茶人あり世^の類ひ^のに美男十七八

より也折鳥帽子小黒乃水子く有り湯茶と云れ

しと云こ^の以^の六^の月^の九^の日^の冬^の暑^の害^の中^のく^の事^の一^の利

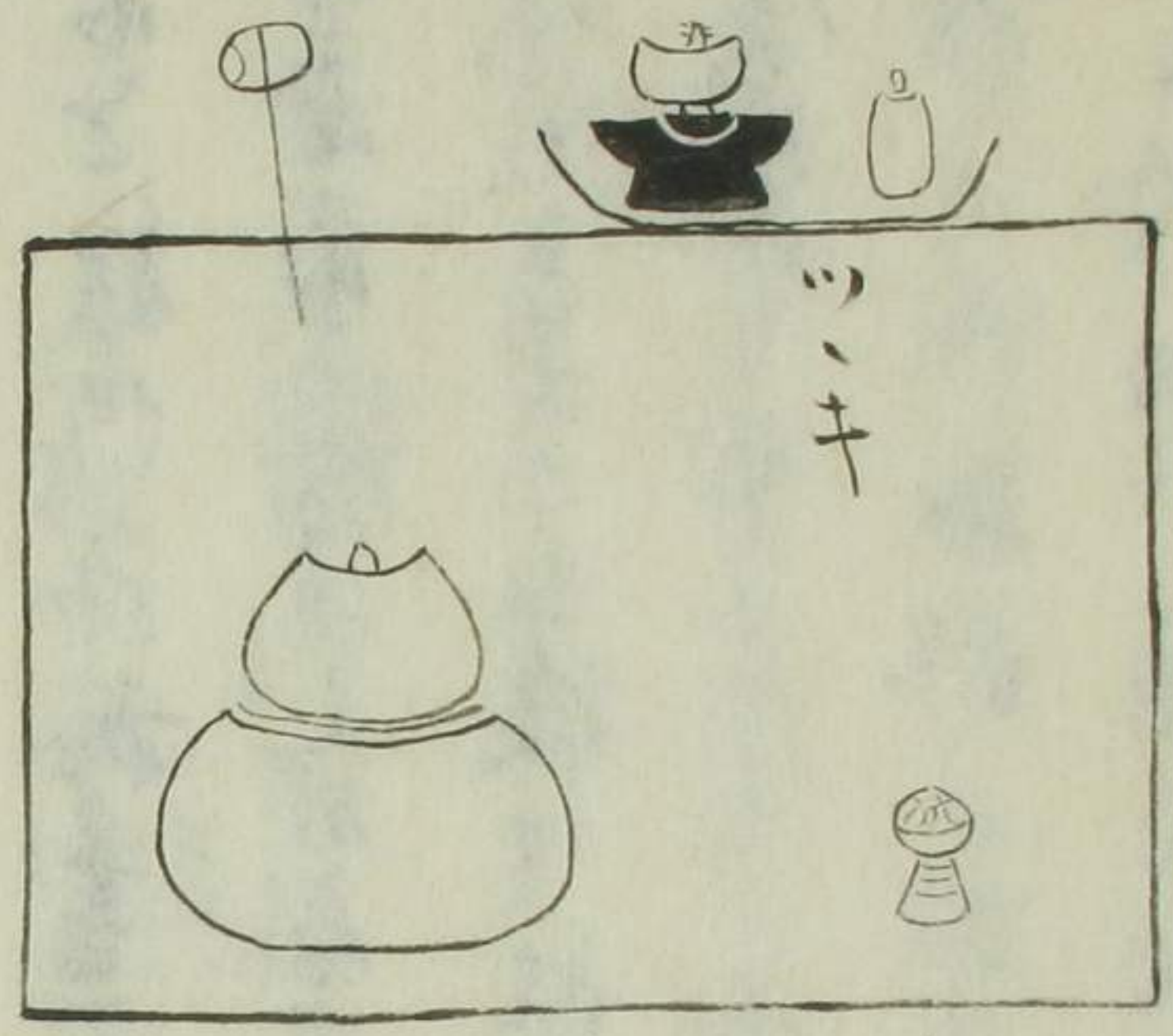
世^の前^のと^の能^の河^の孫^の被^の書^の小^の三^の種^の極^の真^のく^の飾^のりと^の題^の人^の是

佛^の是^の夜^の前^のく^の飾^のりく^のか^のる^のれ^の方^のと^のく^のれ^の飾^のり^のれ^の室^の初^のの

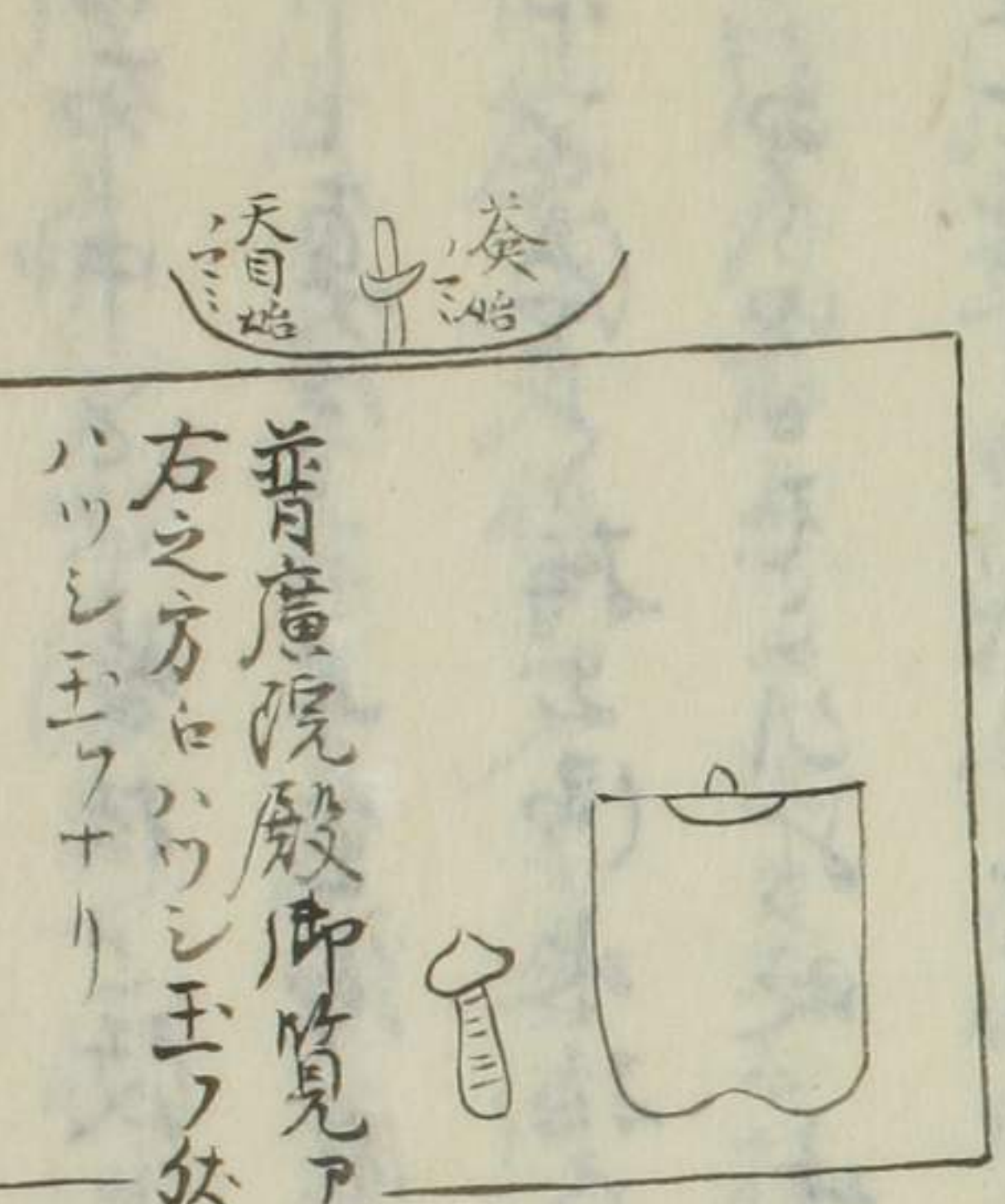
瑞^のり^のハ^の阿^のと^のあ^のても^の没^のけ^のれ^の飾^のりと^の公^の屋^の子^のと^の度^の二^の面^の湖

杯も没けなり

マウケノ貳ハ柄扱ノカ子ヲハツシアリシニ赤松ニツサシ
ハコジテノカ子リノ貳カヅキカンベンシテカ子ニ二分掛リニク



初北ナリノ氷指ヲモヤハカリ



普廣院殿御覽アリテ佛茶^抄佛自化工へ佛早下有
右之方ハハツシ玉ヲ然ルハ粒アシキニ付又柄扱モ右之方エ
ハツシ玉ヲナリ

御水指とるこひ書^士——らう^一 然るも皇子れ前を正ヤ
風流れ前を正直——御水指を本座に正す其前懐中
の白布中^中と以長板と改えて御水指飾也ホヤ風
水——真中に上を御勝もゆくに只水と入ふたる
大茶巾と添く持て御水指乃蓋ととりくも板を置水
八分——ゆるとこひれ暖み水六七もや中を口より改
後蓋ととりて拭ひえれとく蓋として胴をも捲く
あつた先ホヤとえく改てかし前を正して飾る皇子

相帯ゆくと御勝もコホし取入たる 公方を初御門
執事此輩見物也其時かへ茶碗茶釜茶巾と入持
出風流の前を正すコホし持て前を正す其前懐中
時天月茶入又袋入く其後元のこく飾り金故がハキ
茶巾紙に包たふ紙のる入く懐中より水指と不
改に口よりゆきて初れこくは飾り金相帯
ゆく皇子飾り前と正し其相とあす板を正く皇子前
こく正す皇子前を正く左右袖に合く一れ右り

是より御所普廣院殿御座と云はれし事
を多分の時とれあり始に二度に

普廣院殿御代いつれに山荘に御座り彼三種初
見お多れ御座り入量とて一々忠告礼入を
と討た山荘火を掛御座り火入りく大に焼失ス
其時水拍焼ありし事も普廣院殿に記されし
まうりぬりせよとて此御水と次て普廣院殿に
勝り持入ありし普廣院殿に水拍とせよとて其

暖氣暑き事と云ふ事あり必しする事あり
あつた普廣院殿に水拍あり内にも普廣院殿の紋あり
く水と云へてれ入能く奇なり此寶と云ふ
右にぬき普廣院殿に入るる普廣院殿の一極好汲こ
ホシに於て改く御事あり鹽乃水とて是より
茶はがされしと云ふ

西湖家に入るる普廣院殿と云ふて遠く棚にあり又
ちかへ棚の上にも飾り普廣院殿の紋ありし事あり

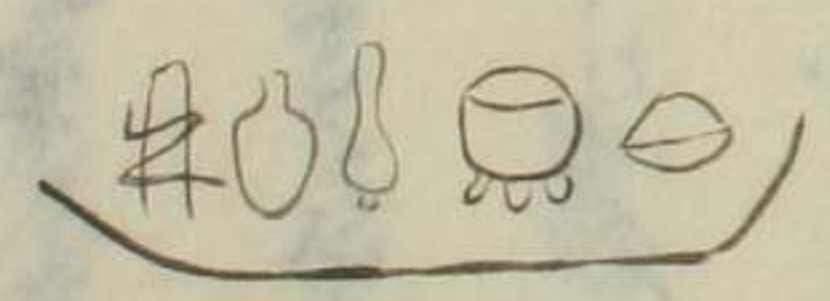
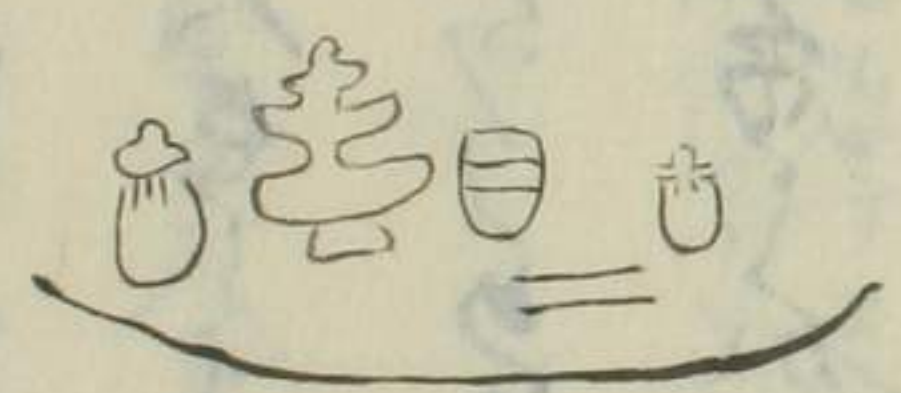
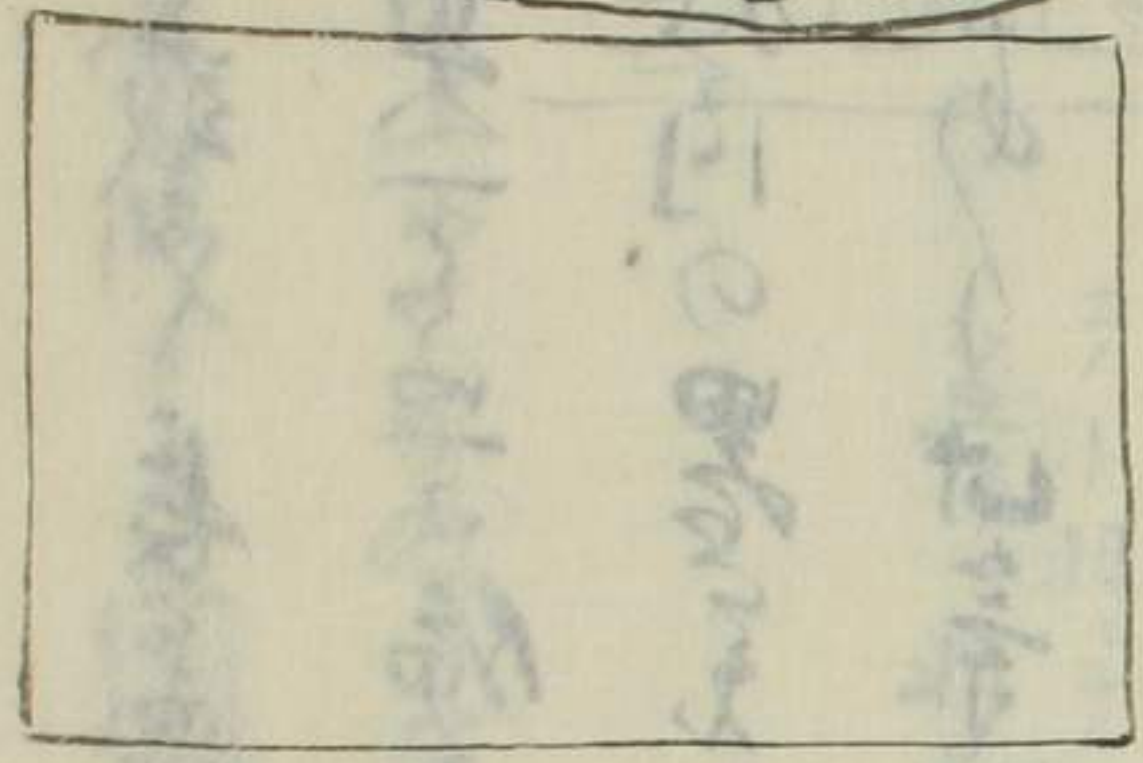
一と一物かしく具外き二分此曲尺に多中此
配り能く即弁る句——又くふも多あり於疎客
ふくう問するまき——休云り

月山師も無嫌念花子花山天月果而上座に飾れ
是室初あり去れた大切し即道矣上座に飾を亮
きんありめ何故ふも即賞就有座中食をありて
別ま無き新を別修ふ賞觀あり嫌念花山を
月山も無嫌念花子花山天月果而上座に飾れ

月山組下し勿論極極立二ホシ等もとり退ての事
系持る普庵院殿師自化して二種に流る二ホシ
小徳入也三徳と品極真大也

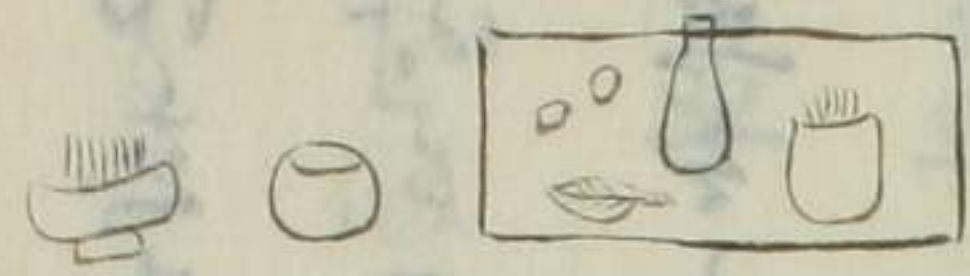
世請る仁年皆悉又えれしく小徳入しく此金人そを
指別秘教故大なるこれ運いと憚り也想るめ飾時を
師系一腹具修別席小移り流し薄茶を石上より入
何時もても流るく薄茶杯をかまへ根本に故に草庵
系入茶碗もも名物なりて此賞就たるをせしむる時

幅巾八寸或方せういたまふ惣格くろりふくせひ
 ろり尺長し巾もせうのくろりかみも格も一人守
 せうせうのいたまふもふくせう八寸巾八寸せうの
 たまふもふくせう八寸巾もふくせうのいたまふ
 或ハ天目茶入毎年大海をのり或ハ香具用いまたふ
 但合格有りくろりふくせうのいたまふもふくせう
 くろりもふくせうして料金のたれ記入神ノ香後ノ香
 香師ノ不仕かりあるふくせうのいたまふもふくせう



尺長き色に飾りすへに爲之始終もまた天井にて香

香も運の茶のき先茶入も運と運ふも一茶入
 凡そ茶載も運入子飾る事もつり具取天
 目必見ふ載る長魚此内小ちる包かさる事有り包
 角茶香具一も運飾る人をも事あり也人若や
 う小盒此内の器も乃物なりつり具も運りも運
 飾る事ありけき初を茶かさるなり薄茶を
 滑り合とれ事あり



ナカカウホシニコウセキヤウシカシ立
 コウヤコセキキカウ入ハ等
 コ小羽ニテウツクル器テ尺長杯取有
 中ニ羽茶抄コウハシウケテ自中也

重香合ハ上めて客取ぶも入る是を茶持
 包一茶ふて取小開事有りま茶こつり右好打
 包改布とす中ノ重ニ茶之者小依り茶包取も又包じ
 中ノ茶包上ノ重ニ茶入も流もありトノ重小茶入も有る

或ハ八角を礎香入りしてあるも有也
大丸もふも漆を貝一面に唐に似せ二重のせうしたるを
ふしかりしむるものと外斗り肉あり又渡り一尺守り
中斗も丸き一も漆を金彫丸き形あり合福瑞
せう切立さし一渡一尺式と有とある是を佛香果
斗りし時も用也又丸き一カへ二四方と有人も丸き有り
凡中もふも丸きと四方中も丸きと丸きと有る

月山長魚

趙昌雷金

山常長魚

中丸魚

大丸魚

尺長魚

左に板を以て飾りをはり外にも色に似飾り真草花
敷と知す形に似る佛も魚も金も茄子月山天目等
と度其火の焼失す青磁の水指を残りしれども其
刻一故ぬるも其に似る

鵝休し草庵以前是子より中板及象牙木を以て
與人道具と用其後古く物用ト云凡て其魚成しを鵝休

相決ふく名物もも磁ぬき魚も用中右実のれハ左蓋
み限るすめりき魚いふ命——右にぬくう、残矢う、後
せめく寸法を字——いふ思ふ御ゆは右——ふ寸法は仁經
——ふあふふ宝藏を行人細川果書に御云人日記他史
ふ頭おふ男中有り——は御もて寸法を細書に記し
金とらとるふ御藏不斜佛腹裏百可くぬくられ
——則字——あふふにぬく御ゆは右ふ記中ふ亦京中
火災あり例二年と經く所ふとふ、或は字御ゆとハ

是也皆是條也且後亦結構成御ゆとも漢より後より用い
るゆ——うた本式ハ右字も御ゆは右ふ記中ふ亦京中
上字——ゆき或る左もも斗りと字も或る尺長斗と字
さふと東に殿ゆは右ふ寸——とてまてはふし飾りも悉く飾
とるふ理に説くも無縁事と右にぬく寸法は休有之
本より以字——金也真に事飾りゆれふ入る飾りも
草席も柳も^香踏金事有り右あふふがを御入る
吉しん番炸をまて候と以方——とすく右時おふ座ゆく

竹居棚を多に敷て佛入して佛しと云り院御まゝ
籠りて佛ししと云記を床へけて右ふくむ佛也佛
棚中板の中央より右より左に佛あり即炭を佛
棚の左炭汁の角に炭圍二つをとりて右ふくむ佛
棚の右ふくむ炭圍をとりて右ふくむ佛也
佛棚の佛しすのびと多を入る炭ケありと云今一つ此
多どし得と火相を多に敷て佛上お念を掛法事
候ことにはお念を佛と云きと云り炭ケの上や右火炭

えりし時香を次事しと云り何事お棚の上より事と云り
休むるしと云り火相肝要なりと云り火具候候て
火相も十と云り火相也と云り火相と云り火相と云り
人を多に佛しと云り火相も佛しと云り火相と云り
茶席草子席方も多しと云り火相と云り火相と云り
さうり候と云り火相も多しと云り火相と云り火相と云り
タカ香が火と云り火相も多しと云り火相と云り火相と云り
実者なりと云り火相も多しと云り火相と云り火相と云り

香炉を客にいさうあつていさうくみぬの因へし書院
ふても香初時各香を進める角いと云い

香炉は右にふて上かけいさうく取上たり
あつていさうくいさうくと右足の間へ指さす香爐大り
指さすても得と云くおたもとをいさうく書院でいさう
後香爐を必と云いいさうくと右足の間へ指さす
香二具ふて香炉前を極むや果ある香爐をいさう
あつていさうく香をいさうくいさうくいさうくいさうく



香合をいさうくいさうくいさうくいさうくいさうく
物香をいさうくいさうくいさうくいさうくいさうく
おあつていさうくいさうくいさうくいさうくいさうく

草庵^倭庭香炉所かにあつていさうくいさうくいさうく
香初月香に時々いさうくいさうくいさうくいさうく
いさうくいさうくいさうくいさうくいさうくいさうく

為ふは湯や、浴桶を香たる別、^う芳敷有、^し故是を
と、^し此も、^し灰押方、^し杯、^し真ふせ、^し此れ、^しと云、^し休、^し云、^し大方、^し順、^し入、^し此、^し
刻、^しく、^し客、^し前、^し香、^しけ、^して、^し入、^し車、^し更、^しと、^しか、^し此、^し上、^しせ、^しられ

代、^しふ、^し入、^し履、^し入、^し香、^し籠、^し可、^し持、^し人、^しき、^し日、^し以、^し能、^し香、^しと、^し持、^し包、^し
お、^し香、^しけ、^しき、^しや、^し香、^し炉、^し法、^しを、^し多、^し人、^しく、^しふ、^しん、^しき、^しお、^しす、^しか、^しと
少、^し持、^し下、^し香、^しの、^し直、^しに、^し通、^しす、^しへ、^し上、^し客、^し間、^しゆ、^しと、^し幅、^し巾、^し中、^しに、^し通、^し
香、^し籠、^しを、^し載、^しせ、^し返、^しす、^しや、^しな、^しか、^して、^し一、^し同、^し礼、^し有、^しり、^し凡、^し香、^しが、^しる、^しは

持、^し扱、^しふ、^しり、^しく、^し客、^し懷、^し中、^しに、^し香、^しと、^しお、^しす、^し包、^し香、^し秘、^し藏、^し
少、^しと、^しお、^し持、^した、^しる、^し事、^し人、^し之、^しに、^し香、^しも、^し心、^し名、^し香、^しも、^しは、^し毎、^し
再、^し炷、^しか、^し一、^し切、^しり、^しか、^し利、^しと、^し取、^し包、^し一、^しく、^し床、^しふ、^し也、^し櫛、^しふ、^し上、^しる、^し事、^し
有、^しり、^し香、^しの、^し車、^しハ、^し終、^し度、^しに、^し通、^しられ、^し一、^し尾、^し打、^し忘、^して、^しい、^しる、^し一、^し
休、^し通、^しり、^しふ、^し御、^し厨、^し子、^しを、^し湯、^し桶、^しあり、^し是、^し御、^し桶、^しを、^し湯、^しの、^し香、^し桶、^し端、^し
る、^しふ、^しに、^し傳、^し有、^しり、^し名、^し水、^し遠、^し来、^し會、^し客、^し前、^しあり、^しと、^しせ、^しい、^しる、^しは、^し
客、^しも、^し老、^しより、^し早、^しく、^し行、^して、^し始、^し終、^しに、^し勤、^しと、^しい、^しる、^しと、^し言、^しと、^しす、^し客、^し是、^し座、^し
有、^しり、^し水、^し換、^し扱、^し一、^しく、^し釜、^しを、^し上、^しに、^し勝、^しも、^し持、^し入、^し底、^しを、^しえ、^しん、^しい、

おと迫り菓子ふしすは有り待遠き所——遠柳
食酒杯有菓子末その人亦を待はく人ふても其記す
吉し方多てを度なれすいんふれく悪お天目もどて
先湯と水と入く一すて見^次湯^湯はきて下すぎ且又
茶各すしきも次うつり香すき惣合ふ度之免角初
香すすきふん中き之菓子退く客もそ人宛合てふ
氷おさへ——同じを合か二種二碗を何れさうも
之客は能事ふれしも左一本や持合すあす

と休より又御成れも茶^{とて}新茶の時東山殿く二種
立三種立も有り——といふ二種二碗も切張ふなり草庵
今中をふ言

書院小床遠柳ふふしと立湯り口切りし中あり板板
以席かとり下——口と切りや将束はつとたん^時は客不色し
く立とんる飾り^封中下させ付てんやう活きて勝
持入く口切りもあり又客前めて小刀目入るまであてし
希ふられ中ハ切り中一日候之具外板作法有り

うり居し〜能う〜
陽相も雷鳴しトウケに
カニ七活き陽相肝要あり

東山殿佛書院の頂上殿と云蓮ノシ
北の廊殿と云化飾り物香炉打坐物と云格違之格亦
鴨赤を柳の懸麟南殿の頂上押板のく身たり此
眼を〜廻りたりと云柳のキリと探も同筆あり
北の殿を右の方を見る皆ト注、
近この書院も床に付人得有令ト頂を

以言レスそれ大谷高家の白中殿より南面北面別
これ法具用事ありと云候ふなり

卷との六より迄この指入るる巻何れも其書に
中殿迄進み此一卷の所を余り〜と云く此
事と云書顯〜年月後他人も此の秘する
依り〜と云非世巻なるなり成すも沐るは
得とも秋亦方にかやの書神と云〜る留金に
おも信を履に及得た秘事一拂底に〜と云下
堂りものなりと云候なり

十二月廿日
集文之序

宗日

右に如く世巻物の奥書に〜と云く文を添へる

此中より速く破れ去ると思ふも世に物忘れ多
く年相傳ふ事も往く事すれども事には惜な
他見する金も物も福も命も忘れゆくもの
ふ折込金く往見の一巻より真に大秘れ真秘也

臘月五日

南坊啓

臺中壚談

喫茶大略

飲すは夫茶を南方より木鈴を延て味を治し
茶也之宝佛神魂とす此七統仙灵に通順し
称する漢和古今是をたしむ人教ふふいと
あらず日本に茶の初りし事梅尾明恵上人入唐而帰朝の
後茶の實を拾得り初られし中世説ありし是と考
るる事申行事歌合に云ふ我茶とて偽茶賜ふ事
有りしれを茶は公れとてかき流る初め有りし
むう一合大内も茶園有り也梅尾は上人と云ふ

茶の種を桂初帝へ中平事むが事ふてト云、
凡行事天平十七年九月平城帝の時中宮の僧、
盲人以大般若を讀しむ有り宋每いふ事を負
飲牛中ふとらん明あ上人は後多羽帝御定ふしと
時せ違ふたりとらん明あ人讀う者ふ入るふ光禪
師は入る帰朝後茶の實を明あふ送て昂梅尾に
桂也世教ふ光の記録同事之歸朝の時茶の實を
儀宗に寄福ち背振山に栽中記より聖福ちを曰ふ

禪刹に初子光の同基鎌倉をわく初朝所讀し
く後鳥羽院に奏して刹建ふとらん故に桂桑に初禪
座額字後多羽帝に宸翰今ふまわ山川に西あやの
や三つれは茶の實を寺内に背振山の栽し事并金
利也と考へんとはふ光明あ記録桑に初と云事
を本文を實して後人の新説も諸舎を加ふとらん
く明あふ光を茶を好む所ふ茶を桂或は功能、
茶の種を桂初帝へ中平事むが事ふてト云、
凡行事天平十七年九月平城帝の時中宮の僧、
盲人以大般若を讀しむ有り宋每いふ事を負
飲牛中ふとらん明あ上人は後多羽帝御定ふしと
時せ違ふたりとらん明あ人讀う者ふ入るふ光禪
師は入る帰朝後茶の實を明あふ送て昂梅尾に
桂也世教ふ光の記録同事之歸朝の時茶の實を
儀宗に寄福ち背振山に栽中記より聖福ちを曰ふ

今日ハマ
但日本
始リ時
天然と
と勿く
長幸治

頭風と茶俗に云ふ消消す其の記明人々の誤りかや利休利休は茶の茶

ふ、寺道陳れ門寺成、経路時、宗道とて

世に用ひらるゝと以道陳れ、合合寺と経路

門門、やゆれとて、是係路と陳と茶茶なして

ちりま、かとし、南坊宗啓始宗慶前を故有る寺、堀

南宗寺、傍之堀頭集集、居、住、一、休、とせられ、別

号や宗啓を、政、龍の法嗣利休の時、山、有、別、人、之、集、

庵、今、利、南、宗、と、此、内、右、堀、市、人、兵、火、時、南、宗、と、集、

寺、居、と、小、殿、と、今、集、寺、居、の、庵、初、高、再、具、あり

宗、啓、利、休、茶、道、と、と、利、休、元、より、禪、法、を、承、て、あ

地、法、令、一、禪、林、宗、欽、同、法、事、初、は、れ、る、白、瑞、を

と、た、世、宗、啓、を、門、才、と、後、法、欽、を、た、一、真、味、喫、茶

と、先、と、茶、居、内、外、た、熟、と、故、と、啓、と、た、寺、も、院、と、寺、あ、

草、居、た、ふ、あ、相、傳、と、た、休、と、子、孫、茶、り、好、む、者、あ、は、啓、

導、寺、と、つ、れ、と、進、と、と、つ、れ、と、た、龍、の、茶、人、へ、

利休家傳系圖

利休宗易

少菴宗源

眼前道安五嗣

元伯宗旦

閑菴宗拙五嗣

一翁宗守同前

仁孝宗元

良林宗元

宗元

仙叟宗室

常叟宗安

右が房を養子なれど嫡とす利休切腹後蒲生氏に
移されし金持の伯父氏所を体し門下を依り是迄
や秀只に馬時が房に在る次第ある徳と病所年
これ多而も人知せられし思ひて終に宗地と稱し

退休せり通安を河波峰須賀氏に頼まれし阿が
有り同所にて卒し通安を体し實子や宗旦四子宗極
并宗守を嗣ふ——宗元宗室相續系に如し退休宗元
を信宗の娘方と孫也今もた八代を体し甥之め
物と尋り宗室を長命元禄十年に立せし今も
宗安を實子や外傳相續来りしと云ふ宗元
宗源の孫元と實とを誣言する中にも小松寺宗室
依り誣言天井を子と白紙を也一間床見子と飾り

うけ草庵く式ハ臨み決してある次し二あるあり初めなり
臨み山里二あるあり其節ハ臨み休庵茶湯果とて定む
子乃本親を庵つし用も半等閑あるなり茶を喫する
漢古き法臨み盧王川とてく其人多くしとて
或ハ摘或ハ行或ハ砥或ハ割或ハ煮或ハ煎或ハ半專
記とて庵盧同七碗仙靈も通すなり福あり丹岳
子菴山君此と控んし骨とて不換ふなりとて大い
白露のく七味喫著とすなり其味もすなりとて此

関を庵のく本より世故林小く趙別入喫茶立神
果法靈の茶瓢用信適飲山此茶庵法話とて其なり
ふとて其法とて其物多しとて此ハ茶三味乃文會の法とて
其あり次神林とて人々ありとて此ハ茶喫するとて其人
其れ茶を臨みとて其親等ありとて其有るなり休庵
士以前より其法とて其式とて其法とて其味とて其事
を休庵かかみ世話を踏破とて白露地小歩を其法
其波二あるあり席一抱茶庵小く其法とて其味とて

別ニ乾押有と樂あり天正十九年二月九日換新掛り
休切腹す將軍家譜あるまの意とを傳
兩局の金まのり——実説を云ふ所の娘容顏美
成るを以て夫と体可はるは中令有り世に云ふ如姻の約
有りし故といふ事有り娘も腹を白割す命に肯は
事憤りあが後悔い言も又相交り他事を云ふて切腹
せしれ檢使前田清治と對して一腹を云ふと云ふ自
喫茶——切腹す

辞世

人生七十 カ圍希咄

吾這室劔 袒佛共殺

と傳はるが得る具足なりと云ふ太刀

今これ時ふ天よりけり

一頑一様と意味と云ふ事ありて傳ふに此は清茶碗裡禪

後世衆人の口をばをいふにくす居士衆難あり
うは世の人と云ふと傳へる事ありて表ふ遠き家

居士門からうゝ人も悉く他れ奉人ふ心とて人々
流一時の流るゝ宗啓を人々とてある事とて
茶味の様行事を希く行脚し心とて人々に文派と
三月十八日より集雨庵とて具行とてある事と
一流の流るゝ心とて奉人ふ心とて人々に
心重なりとて心とて奉人ふ心とて人々に
天下や平場なれ法人心とて人々に
多し大樹の心とて心とて奉人ふ心とて人々に

あゝ上り右陸おせん旦を氏有人とて心とて人々に
りんゝ乃世御おせんと令し着る心とて心とて人々に
写し心とて心とて奉人ふ心とて人々に
礼せまおせん心とて奉人ふ心とて人々に
後世に成る心とて心とて奉人ふ心とて人々に
食し心とて心とて奉人ふ心とて人々に
右とて心とて心とて奉人ふ心とて人々に
要路も心とて心とて奉人ふ心とて人々に

多令古識等一 家先と師師を補せられ寄
るに海活あり武門に成凡と云ふ一人の人も
成り好むと長しぬと云ふ次 今言をぬく
藤若菜のふひ初より用ゑたるすけりと思ふ小遠
儀も居士の法と云ふあり次体と云ふ境界と云ふ
為用との根より事たること 大樹を友人と撰む
も強く茶道と修練と云ふいふあり次法人の師と
しと和融の道と云ふ一得と云ふありと云ふ者^物

語り感懐する古識親類の老人を全衆像と云ふ者此年
を越り大野道がそのまゝ院を子草庵と云ふ一流を
極めしり今世流を考ふ体と云ふ古屋より云ふなり
古屋古識居して朝夕此を云ふ古識も古屋より云ふなり
道流を極めしり古屋より云ふなり古屋より云ふなり
次志のれを体と云ふなり古屋より云ふなり古屋より云ふなり
次志のれを体と云ふなり古屋より云ふなり古屋より云ふなり
陽ありしなり古屋より云ふなり古屋より云ふなり

右に古儀に力量を在る能なりと云ふは、
至師に橋を架きて、
風と小遠風と格別ありと云ふ人の事、
とて小をて同体日本茶湯に元祖より後世にまで
茶湯と好む人利休風と云ふ有るなりと云ふあり
かゝる人其故ありて利休と云ふやうの物まで大禪師
達に里を誦すもたゞす貴族として掛る但し法具と
さるにありて宛達する事有るなりと云ふは、
口にもすむ難い世に

福とも其間に定めて置る戸口にもすむ難い世に
あはれする法を以てなり利休茶と云ふなり
と云ふ人其茶を好む。法風を境界と云ふなり
と云ふなり。小茶と云ふなり。乃ち茶を好むなり
と云ふなり。乃ち茶を好むなり。乃ち茶を好むなり
右小を誦すもたゞす貴族として掛る但し法具と
ハ西の茶を好むなり。乃ち茶を好むなり。乃ち茶を好むなり
利休風と云ふなり。茶湯は度におもひと云ふなり。人に見

答ふられ他は師範と我々爲れ別中と云ふ事
と云ふ事あると思ふべし人々云ふ事と云ふ事
以てたゞ之れと人々云ふ事と云ふ事と云ふ事
所より一に記せり云ふ事と云ふ事を考へられハ小遠
法味を云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
すゝゝゝの要と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
情親交りたり云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
る中云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

多限ある事——執行の只人々何事角又何事角と云ふ事
事々々草居たり云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
事々々事々々事々々事々々事々々事々々事々々事々々
右鐵小遠は時々人々と云ふ事と云ふ事と云ふ事
斗科あり云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

雨路地大概

雨路地草居たり云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
品小長者脱たり云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

亦高みよの白平と云白高みと云り世乃し垢清りしを
新し一々清淨しと云く物底をこわく居行て白き地と云
外相を樹石天然と一底之一も不啼雲埋む老樹と
佳境より云れは市中一宅と云白く地形勝麗き稀
也木を伐り竹をむからし朝夕をみせめて月高
小あし海かゝる底の内もれの片から方野かつく
息を思ひむし清くまろ人もとひてまじりて林を
きし心有女と侍てを雪れ砌ををるあ保其風鳥り

わろく正々しきし集雲庵れまみし松下堂と云閑心
を結合する用ひて一ねし看板をかき其具文也た

一宿客腰掛かましく同道し人相揃り版を打響け
可報

一々水と事ともし人頭とすまを収め道に肝要と云
一庵主と清く客居ふ入るを一庵主と云わして茶飲の
法も不偶美味又云し一諸地し樹石天然と云其心
を不得まを後其早く清り云し

一 佛湯松風なるは語をもちて客再來湯相火
相もまたなる事一多罪に

一 菴内房外におわく世半の雑話古来所之

一 廣之曆然と今巧言令色入句かす事

一 一會始終二可とも句かす但語話清談の時うづは

別升

天正十二年九月上巳

南坊主判

右七ヶ條ハ茶會大法之要茶事不可忽者也

宗易の立判

露地の頭よりして初めく用事してあつた然れどもして大道に

臨みせしめんといふ二師の御切茶をある人より載の下にむとて

うめき信さるゝおきなりは悉く世七ヶ條にすゝる流中休居士流の

あぢきにい流母の外入道なる人のちうをたとひする

茶會大概

釋氏要義に同章に収めをおりしをを店といふを流に曰
書院是子の式に世より大法に存する文字に真入といふ

道人おも可者と極大家をくくても松極竹の極曲
在る有る不似せく上下左右偶するものか——一の家
屋おもしろことを補ふ若物を古新輕重長短廣狹
亦かけしを神の破れしをけり免れ角も偶らん
事か——一奇れ若物おもしろ道果とそを極大其用
者記奇りて偶せし事——不勝斗又奇偶一同あ
る又偶の奇環然を點するをいふ事古を言する
小及し若事れ字ハ何處れ物おもしろ杯ふして事を

好むふれをたのむ草花類は大小遠ひ——世間におも
者やふれ物おもしろおもしろ物おもしろ道果と成濟と
う是を茶湯と見たりから——いれ物おもしろ二字世の塵
小埋没して百有餘と

春物大概

夫天地之間有物皆以形著之大小也短天也地にして
元來飾り用命か——次形よりと神を神と云理し
いひぬと云從天地と云遠る有る——と云うことく

物是也其理を以て正れば益則とふ意一其益は
それと理別はふふ一なるわく陰陽動靜
事理作用とて一元又二のふを知らぬ一益を
奇之天地を才一代大益にしてふかも上下陰陽日月
各欲し奇ありおふ數奇なるをくふふふ
人々世をふく情欲と情す事くはく一むふふ
其ふ限とあり一單一軌此は事を知りふふ
外に物のとらふふふ欲知是の本意を得る

其ふふふ一を得る時二と物ひ三つをみふふ事
斗ふふふふ他は物をみふふふふふふ
一其ふふ行事一其ふふ物ひ多し道果は
古便は極意とすふふ目利者高家此流にふふ
一凡ふ用ふふく用ふふふふふふふふふ
一其ふふ物金字玄有時小ふふ世人の利は
ふふふふふ物ふふふふふふふふふ
て名物といふ今ふふ人これお奇きふふふふ

力と云ふを所杯しと云ふは送られし何方そ
いふ人の人足と云ふも嫌ひ者そ人か押さへ
く好むと云ふは休増む物おあへと云ふは
中よりこれハ小遠是答同と云ふも我寺の
は合ふと云ふは道と云ふは人の説之利休を云
ふなりと思ふと云ふは別々物なり茶をい或は
名を所杯せられしと云ふは代斗なり吹今も云ふても
せり貴教有るをいふは休の茶乃大徳ふして云ふ

新古輕重のちと云ふは使乃合せられしと云ふは
ちと云ふは名物ぬめ之茶も自己此道具ハ凡
茶と云ふしと思ふに似せし人なり好むるを云
貴教ハ至頼の有り傳大各小各我亦我人て云
ふと云ふは右は年具と云ふは好むのち此道具
いるといふは極端を論依して送るや法人の云ふ好む
と云ふは休と云ふは人なり茶と云ふは物おあへと云ふは
まてや休といふは人なり茶と云ふは天地掛隔と云ふ

車と云く所より中橋をええ書あり小遠の延
言息時勝之を効弁る所なり

文會大概

賓客主小對しる者賓客對し人相おれろはせ
所を露の如きをあらけり事をええはつり
とくをとりりりし賓相にお低しすれはる
地類賓客磨然けしなり深同客さるまの人のけ
いしけいさるるに休し令言のつり

休之歌ふ

茶乃湯とるたり湯をいかに茶とあり

香斗り成るなりとていふ

茶は茶をいふなり又他事有るなり深同有る人
茶と秘事ハ何れ事なり同休茶と茶の能く極に
茶湯とて極に茶をいふなりお夏に次ぬ
茶なりする世に秘事なりと云ふ
同休人と思ひてまき
茶は茶のいふなり
茶は茶のいふなり

今、笑顔和尚の如くして休言を極する草の白居
易の意を以て法惠真化後を以て之を以て新のや
之を以て意の如くして八十の茶人も行ふ事能は
ざる命と撰接ありしは同人感佩す云々
又曰法惠利休の茶の意味を

人海世はれも知らざるありしは管金の秋にたる
花を斗りまじりて人ふ山里にあり草のまをさる
と云ふ世ある能くけり建者の況んやれし

宗啓の縁

一 初め茶の旨をいふものなりたるは世にあり

書院真修大堅

茶の板行の茶の利休の茶と云ふ物あり千氏の
あわよく其の旨をいふは悉く書けり休休の茶を
板行の茶や休休の茶あり故に人の茶を
活れしをさるる家には一茶ありて右
と云ふ板本と云ふ板本あり凡ての傳あり

年者れあをまり鳥雲馬とぬりて法を信受者
又ふかし又宗旦風と稱る徒有りなるは休居士
と傳れきたる事とも相交りいふ人とも此は
思ふ体の孫のれたは後天忠と一奇の世格式のな
等ばきまふ湯にせず自れに矩をふす間一
草庵のひれ一軒世外枯あふ地位を得る事や當
るこか一茶を三てと二境を踏ませしはさる者同者
ふんをともえくまゆと教す打破の一九斗一せし樂を

それを見よ休味を理合れ奥あわく解得底の人
かく奇巧の可化異風の淨話を斗る間して茶をふ
透る事多うたまうに集る人を伍れん法を
法はれ後世のふはるものとてふ流行と家をえ事ふ
只根本傳來しと事を以的の相極親切小志をふし時
文茶三味し一法漢和を今に傳ふ事ありは紙端利休は
と泉流しして法所謂休も事以前の茶味^{未熟}は後悔
不^{五十以上}かつ^{七十以上}と傳はるる事理を礙の境入ぬ自ら

もろいし休も世道と云ふはまづしと思ひては編
草^{案も半}居る生るる波極難の時滅後教れずん事
を^まふす焼却せられし故思ふ子に家小好む
惜む命悲むへへおれ外茶必兼か居に受^され多
年指南北極密なる家傳来す書^二何^一なるわろ考
書院見るるを以てし事安し活字年表を
を以てへし書を以て人を得るは昂人なりを以て
得るは昂心書^三見^二事^一埋^一なる内外^同唯^唯多^唯究^唯久^唯得^唯る

あやむ者る字者れ志し乃海きし原記をり或
を小流にすき或を深淵にんとをるすをへし

百年荆棘密 露地耐寒衣裳

爐火紅一點 井華洗鉄鍋

草、布、すき、道、あやむ、あやむ、あやむ、あやむ、草、

曾聞這一冊壺中乾坤之主草名居士
一夕引松庵士尾錐士之二客接之爐談
也

此系陽松月菴寶山

寫之

讀草名居士壺中爐譚

草庵露地淨無塵 一味松風主對賓

物外交情談中趣 知心獨許捧爐神

右

萬山老衲書印

寶山自筆本書校合無相違者也

道桂
朱印

